大阪■■哲学学校■■通信

No.23 2003. 1. 25.

大阪哲学学校運営委員会 Copyright©, 2003

【郵便振替】01170-1-81313
【E-mail】byodo@portnet.ne.jp(臨時)
【Home Page】http://www.venus.dti.ne.jp/~imoto/(臨時)
【Net Forum】休止中
【代表者】 山本 晴義(校長)
【発行者】 平等 文博(運営委員長)
【編集者】 平等 文博

新年を迎えて
–講座「現代アメリカ思想」をふりかえって

山本　晴義（校長）

一九九八年から昨年にかけて、述べ五年間、約十五回続いた私の講座「現代アメリカ思想」がほぼ終わりました。まずこの間、多忙ななかを熱心に出席して、いろいろ問題提起し、はげましてくださった多くの会員、聴講者の方々に感謝します。

ここでは新しい年を迎えて、現在の私の視点で、年間話して来たことを簡単にまとめておきたいと思います。

＊

９・１１以後、私はウォーラースティンがいうように、欧米中心主義的な「近代世界システム」が道義的にも文化的にも激しい混乱と危機に見舞われているのを感じます。そして現在私達が「新しいシステム」、「より豊かな普遍主義」に向おうとするとき、私はなによりも第二次世界大戦後、「パクス・アメリカーナ」を確立し、世界をリードしてきたアメリカの社会思想の流れを知らねばならない。私自身が講座で話をすすめていく過程で次第に鮮明になった問題意識はこのようなものでした。

私の話は、大体次の三段階になります。

（１）　第二次大戦後の「パクス・アメリカーナ」の発展、ほぼ安定した労使の力関係、大量生産と大量消費とで特徴づけられる「フォーディズム」の確立、前例のない高度経済成長の中で、アメリカは現存の「世界システム」の最後の繁栄を謳歌しました。そこではまことにオプティミスティックな「アメリカ・リベラリズム」の社会思想が支配します。有名な「イデオロギーの終焉」論を説いたダニエル・ベルはその代表です。

（２）　大量廃棄、環境汚染、資源浪費……、フォーディズムを支えていた諸勢力間の妥協の崩壊、「アメリカ・リベラリズム」の破産、諸矛盾の顕在化の中で、一九六〇年代末、公民権運動、黒人運動、スチューデント・パワー、カウンターカルチャー、ベトナム反戦、フェミニズムや反公害、環境保護運動など多様な運動が爆発します。フランスでもイタリアでも、ドイツでも日本でも、そして第三世界でも国家の枠を越えて噴出します。それはまたスターリン批判、ハンガリー事件やチェコ事件など既存の国権主義的な社会主義諸国や「旧左翼」に対する「異議申し立て」でもあった。

そしてこの運動によって世界システムにおける「国家」と「市民社会」との力関係が大きく転換し、政治と言えば、もっぱら「国家」あるいは「階級闘争」をめぐる問題だと考えられてきたのが、社会のさまざまな領域で、いわゆる「ライフスタイルの政治」が論じられるようになりました。今までの社会関係を無批判に受けいれていた人々の、日常生活における意識や価値観を根底からくつがえしていきました。

（3） 八〇年代から、さらに脱冷戦期になるとアメリカを中心に「福祉の削減」「市場万能論」「規制緩和」「資本の競争力強化」という「新自由主義」＝「新保守主義」へ右転換します。ナショナリズム、「強いアメリカ」という保守的風潮が拡大します。情報技術による産業構造の再編とともに地球規模の「グローバリゼーション」が支配しました。〈南北〉の格差、〈南〉の世界の中での経済的格差、〈北〉の世界の国々においても〈南〉的状況がひろがってゆく。人類のごく一部の天文学的な富と特権を持つ富者と大半の暴力にさらされている貧者への分極化がすすみました。

「左翼」の領域では、私は「アメリカ・フランクフルト学派」の中でも、アメリカで影響力の強いハーバーマスの限界とウォーラースティンや「ポストコロニアリズム」の提唱者サイードの積極性について述べました。

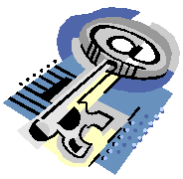
ハーバーマスもウォーラースティンも、ともに「生活世界の植民地化」に抗して「ライフスタイルの政治の実現」を説きますが、サイードが批判しているようにハーバーマスはヨーロッパの「近代」に対する知的確信が揺らぐ中で、あくまでも「未完のプロジェクト」としての「近代」を擁護し、終始、近代世界の内部、「西欧中心主義」を出ない。

ウォーラースティンは近代世界を「近代世界システム」として捉え、中核と周辺、半周辺の有機体とし、「周辺」「南北問題」、「ポストコロニアリズム」の視点から、「非同一的なもの（他者）」をも包摂して「別の世界システム」、「より豊かな普遍主義」をつくっていこうと言います。

私は、それは現在のアメリカ一極支配のグローバリゼーションに対抗して、地域、国家、人種、性差、文化を越えてグローバルに発展している多様な「アソシエーション」の諸活動にかかっていると思う。例えば平和、反核、労働、農民、女性、マイノリティー、環境保護など各レベルの運動のネットワークをローカルに、そしてグローバルに発展させていく中にあると思います。

＊

新年にあたって、私はこの講座「現代アメリカ思想」から得た成果を、ささやかでも今後「大阪哲学学校」の発展のために生かしていくことが出来ればと思っています。



今年、私が注目するもの

泉　史（ふびと）（会員）

ソ連崩壊後、全面勝利したはずの資本制社会の混迷・困窮・不平等が約十カ年続く中で、一つは、現今の社会状況を、資本主義の精神もしくは資本主義の哲学が切りひらくことができるか、と云う問である。

二つは、現況の中で科学的な社会主義がわれわれに好もしい影響を与え、われわれを指導し、群衆をどのような必要とするのか、と云う問である。

三つは、大阪哲学学校での議論・討論・検討が地球上の世界各地の群衆または社会運動と心で結がっている思想的態度（この常にもつ問題意識と緊張感）の継続ができるか、と云う問である。

四つは、ソ連・東欧の過去を、本当の社会主義とは何かと云う視座から、イデオロギー・社会制度・経済の仕組・日常生活の慣習住環境・教育制度・文化芸術などを解剖することが冷厳にできるか、と云う問である。

五つは、中国・ベトナム・キューバの社会主義の体制・制度を取りつつその箱の中身に対してその内容を、リアリストとして容認するのか、或いはそれを新しい社会主義と位置づけるならばどのような批判的摂取を基本にすることができるか、と云う問である。

六つは、農業問題に対して過去に不十分であった社会主義理論は改めて、唯物論と農業問題との新構築を目ざすべきだと云う提案、新鮮な着想から論じることができるか、と云う問である。

七つは、田畑稔氏らのアソシエーション革命の、

昨年は序説段階で終ったと私は思うが、総論を目ざすためにはもっと多くの発想と討論の多様化および何(なにどう)を如何変えるのかに於ける具体性と理論的計画性の問いに介在する、党派性（政治）の嫌悪を、どのように払拭するのか、それに貢献できる議論が継続して展開できるか、と云う問である。

八つは、山本晴義氏が追求した反(アンチ)・グローバリゼイションの理論（哲学）を日本の風土と先端科学技術の所有化との間(あいだ)のなかから東アジア地域からの発想として、過去の日本人哲学者・思想家の認識を活用できないのか、できないとすれば何が障壁となっているのか、と云う問である。

九つは、平等文博氏が提出した超高齢化国家社会に於いて、いかに死ぬかと言う、個人的問題を社会的問題に展開したことの、宗教・精神医療を含めた現代の哲学化への急行が、その体制化・制度化の進行への積極的な批判として立ち顕われ、それの哲学化を通って文化に至ることができるか、と云う問である。

今年、私が注目するもの・こと・ひと

藤田　友治（会員）

昨年、哲学学校の山本、平等先生たちの援助によって拙編著『日本の教科書の歴史観を問う』（論創社）をまとめることができましたが、その中で、歴史における事実とはなにか、歴史は国境を越えられるか、と問いかけました。

国民国家の中で民族や国家のイデオロギーによって、事実や歴史がそれらに都合よく変えられてきたのが、近代・現代の歴史でした。これを越えようと試みたのです。中国・社会科学院の歴史家や哲学者との議論を通じて、それは双方のねばり強い努力によって可能である、と確信しました。その際、自国の利益・イデオロギーによるのではなく、事実に基づく「実事求是」と哲学がなによりも必要である、と思います。自国を中心とした一元史観から、多元史観への転換を試みる「多元的歴史観」を季報・『唯物論研究』第８３号に執筆しました。

「大阪哲学学校通信」２２号の「大阪哲学学校を知的協力会議へ」（義積弘幸）の提案に賛成します。大いに議論を「大阪哲学学校通信」でしましょう。さて、角　伸夫氏の「大阪哲学学校の会員になるにあたって」にすこしメッセージをおくります。中学校の現場は忙しいと思いますが、現場にいるからこそ見える視座があるとおもいます。入会を歓迎するとともに、これから色々と哲学をしていきましょう。「新しい歴史教科書」に対する現場の先生方の意見はどうか、報告くだされば幸いです。「仮説実験授業」は私の属する高校でも、熱心に展開する先生がいます。生徒を主体として、教育を考えているのはいいと思います。角さんも「押し付けを排除し徹底的なこども中心主義」に賛同しておられるようですね。私も試みた事があります。授業は確かに活気づきました。しかし、A, B, Cと生徒に発問し答えていく方法では生徒は「主体」にみえて、その実あらかじめ教師が設定した発問の上にのって答えている事となります。問いに対する選択の「主体」は生徒でありますが、発問そのものの「主体」ではありません。しかも、学界のさまざまな問題は「仮説」だらけです（例えば、邪馬台国の位置、好太王碑論争、南京大虐殺……）。これらの問題は、研究史を学びこつこつと研究をしなければなりません。「仮説実験」の「主体」はこの場合は研究者なのです。

私は一層、教育と学問の関係、その関係の中の緊張を問う必要があると思うようになりました。そこで、私は、教育活動と研究活動とを分離し、それぞれの「専門家」にまかせればよいとする分業論に立つことなく、自ら研究をはじめたのです。

「教育者みずからが教育されねばならない」（マルクス）

私の最初の書物『好太王碑論争の解明』（新泉社、

1986年）はこうしてできたのですが、もし私が教育者だけであったら、けっしてできなかったとおもいます。板倉さんの「主体的唯物論」の問題とともに「仮説実験授業」の問題もそこにあると思います。しかし、確定した事実、法則、定理を学ぶ際、極めて有効な授業法であるとおもいます。何よりも、教師の一方的な授業でなく、生徒が「主体」の授業であるからです。

さて、鷲田小彌太氏の変節に驚いておられるようです。私もかつて驚いたことがあります。また、彼の優れた本に学んだこともあるので、なおさらのことです。彼のターニング・ポイントは天皇制論にあるとおもいます。鷲田小彌太氏の天皇制論に対する批判を季報・『唯物論研究』において展開した事があります。また、拙共著『天皇制を哲学する』(三一書房)、『天皇学事始め』（論創社）でさらに詳しく展開しました。

日本思想、哲学の根本問題の一つは、この天皇制論にあるとおもいます。最近、新しい史料も出てきましたね（ハーバート・ビックス『昭和天皇』講談社）。その中で、「昭和天皇は指揮命令系統の頂点にあり南京虐殺を知らなかった、というのはありそうもないことである」と多くの資料を基に述べているのは、冒頭に拙編著『日本の教科書の歴史観を問う』（論創社）の中で、歴史における事実とはなにか、歴史は国境を越えられるか、と問いかけた事に通底していると思いました。南京大虐殺については、昨年の哲学学校の合宿において藤田美代子が現地調査を基に発表しました。松岡環さんたちと一緒に中国での調査をふまえてのものでした（『南京戦』社会評論社）。東アジアにおける、市民の連帯はまずこれらの問題を私たちがどう主体的に取組むかによっていると思います。

今年は、中国の好太王碑に現地調査をし、瀋陽にて中国・社会科学院の歴史家や哲学者との議論を通じて、古代日本と東アジアの事実とはなにか、を議論したいとおもいます。関心のある方は是非、藤田までご連絡下さい(Tel&Fax:0724-92-2974)。

私が今年注目する人・小澤征爾

–日本と西洋の〈間（あいだ）〉–

義積　弘幸（会員）

二〇〇三年を迎え、私がすぐ思うのは、昨年から引きつづいているイラクとアメリカ、イスラエルとパレスチナ、日本と北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）などの国際関係の問題、世界中を震撼させているテロ行為等、キナ臭いものばかりだ。おそらく、２３号の「通信」にも、そのたぐいのものが並ぶのではないかと想像する。しかし、私は、やはり、かすかな光を、このグローバル化する世界の中に見たいと思う。（私は、グローバリズムは、弱者も大切にし、ゆっくり平和裡に行なわれてほしいと願っている。）

その点で、昨年末に行なわれた古典の読書会「『饗宴』を読む」は一服の清涼剤であった。やはり、いろいろと批判はあるが、古代ギリシャの哲学、特にプラトンの対話篇（ディアレクティーク）は〈真・善・美〉を希求する〈愛智者（フィロソフーンセス、『饗宴』110頁、岩波文庫）〉の私（たち）にとっては、哲学者の心の故郷（ふるさと）であることに間違いはない。それは、求めれば、開かれる世界である。そして、あれを読んで私が驚いたのは、あの時代は男色（ゲイ）がタブーでなかったということであった。それぐらいおおらかな世界であったのである。

さて、私は前号（２２号）で「大阪哲学学校を知的協力会議にしたい」と述べたが、その意志（こころざし）に変わりはない。その点で、企画が練（ね）られる運営委員会に、オブザーバー（議決権はないが、自分の意思は言える）として時々は参加し、その意気込みで例会にも参加したいと思っている。

ところで、前置きが長くなったが、私が今年、特に小澤征爾に注目するのは「日本人としてどれだけ西洋音楽を究められるのか」という難しい試みを演じ続ける小澤征爾氏がウィーン国立歌劇場の音楽監督として出発する輝かしい年だからだ。

最近「音楽之友社」から出た『小澤征爾とウィーン』の中には次のような一節があった。

《音楽は、世界の共通語とよく言われる。しかし、

小澤は、ボストン響の音楽監督になり、世界的指揮者として活発な活動を展開していた'７０年後半でさえ「日本人にベートーヴェンが解るのか」「仏教徒なのにマタイ受難曲が解るのか」などという質問を欧米の批評家やジャーナリストから受けていた。つまり、ほんの２０年ほど前までは欧米人の心情の奥底には、アジアの音楽家への違和感、懐疑心が根強くわだかまっていたのだ。しかし、小澤は、音楽が秘めた普遍性を見事に表出して、そんな偏見を打破した。》(同書86頁)

こう書いてきて、ある人は、だからどうしたのだということを思うかもしれない。しかし、私にとって、「東洋と西洋の〈間〉」という問題は大変重要だと思うのだ。つまり、私のモチーフには、小澤征爾という一人の日本人が、西洋音楽を自分のものにしていく過程と日本の哲学者が、西洋哲学を自分のものにしていく過程を重ねあわせてみたいという思いがあるのだ。

だが、私は哲学の専門家ではない。ごく普通の、少し哲学に興味をもつ一学徒にすぎない。だから、ただ西洋の言葉と日本語に訳された言葉について限定して、少し思いを述べて、年頭の挨拶にかえようと思うだけである。

なぜなら、〈哲学〉という訳語自体が、明治時代の初期、西周によって訳された言葉だからだ。その経緯については、蓮沼啓介氏の『西周に於ける哲学の成立』(有斐閣)に詳しく書かれているということを田畑稔氏に聞いたのだが、いかんせん現在は古本屋や図書館にしかないそうなのである。ただわかっているのは、西周が最初は、ギリシャ語の〈フィロソフィー〉を〈希哲学〉、〈哲〉(注：①才知がすぐれている。さとい。また、その人。②「哲学」の略、『岩波国語辞典第三版』)であることを〈希〉と訳したということが伝承として私が知っているだけだということだ。

おそらく、日本語に訳す時、〈希哲学〉では座わりが悪かったのではないかと推測するのみだ。それなら、もっとわかりやすく〈愛智学〉ならどうであったかと、私は思ったりする。それなら、〈知〉を〈愛する〉ということが、もっと強調されたのにと思ったりもする。しかし、これも思いにのぼらず、〈哲学〉と訳されることとなった。

問題は、〈哲〉であることを〈希う〉、この〈希〉があるのとないのとでは「全然、その日本語のもつ重みが違ったのになあ」とため息をつくしかない。しかし、今は残っていないが、フィロソフィー、〈哲学〉が、〈哲〉であることを〈希う〉という意味を最初はもっていたということを、日本の〈哲学者〉は、絶対に忘れてはいけないということを、私は、この場を借りて強く言いたいと思うばかりである。

ここまでは所謂、一般論、合理論であって、まだ読んでいる人は「そんなことは、よく知っている」と言うかもしれない。だから、ここから私は経験論としての訳語の問題を考えてみたい。それは、私の持病である精神疾患における問題でもある。

精神障害の世界で病人は大体〈当事者〉と呼ばれるし、それが一応日本語として定着している。しかし、他にも外来語として「ユーザー〔英〕(精神医療の)使用者」とか「サーバイバー〔英〕回復した人」とか「コンシューマー〔英〕消費者」とか数種類の訳語がある。いずれも精神障害者本人のことをさす、所謂「当事者」なのだが、これだけの訳語があるのである。

私が、最初に知ったのは、「ユーザー」という訳語であった。それは「ユーザー交流会」という看板があって、その流れからだった。その次、理解できたのは、「サーバイバー」だった。何となく「生き残った者」という語感があったからだ。

しかし、さすがに「コンシューマー〔英〕(医療の)消費者・(経済学にもつかわれているということだ)」には、面食らった。全然、〈当事者〉という言葉につながるきっかけがないからである。

「コンシューマー」という言葉を使っているのは、四年間カナダで勉強され、博士号さえとっておられる権威者の方なので、自分の無学を棚に上げてこんなことをいうのは失礼かもしれないのだが、どうも一庶民としては閉口してしまわざるをえない。「コンシューマー＝当事者」という無意識の回路ができてしまうと、問題はかなり軽減されるのだが、いかんせん、カナダへも行ったことがない私にとっては、ピンとこない。どうも仕方がない。

そこで、結論めいたことを言うとすれば、誰が、どういう言葉を使おうと、その本人の勝手(決断)なのであるが、できるだけ、語感のわきやすい訳語を使ってほしいと思うのである。

また、〈哲学〉の論理も重要だが、それを造り上げる言葉(訳語)にも、私(たち)は十分配慮する必要があると思うのだ。だから、〈哲学〉の傑れた学者諸氏にも、このことをじっくりと考え

てほしいと思う。

さて、話は、小澤征爾のウィーン国立歌劇場の音楽監督就任記念の年というところから遥か彼方に来てしまったが、〈西洋音楽と東洋人〉、〈西洋哲学と日本人〉を比較したということで許しを乞いたい。そして、このことが、建物全体を支える、かなり重要な一部分についての重要性（言葉、訳語）について、今一度、振り返ってみることの一助になっていたら幸いである。

それは、小澤征爾も、最初は、まず西洋音楽の音符をいかに読むかから、そして、それを楽員にいかに伝えるか、通じるかに苦心をしているだろうから。この拙文も全く関係がないこともないだろう。

しかし、私が少し危惧するのは、小澤がウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の指揮だけでなく、オペラ（歌劇）の指揮をしないといけなくなったことだ。これは、かなり西洋文化を知る、身につけなければできないと思うのだ。これが、今後の彼の最も大変なことなのではないかと思う。しかし、彼ぐらいの人なら、それを乗り越えられると期待をもって見守っていきたいと思う。

（補記）

最近、彼が、恩師だった斎藤秀雄氏の教えを受けた、主に日本の一流の音楽家をそろえたサイトウ・キネン・オーケストラを指揮したベートーヴェンの「第九」のＣＤが限定版二千円という安価でリリースされた。そこで、「第九・合唱付」は既に三枚もっているというのに購入の注文をして、今聴いている。印象は、まずまずだった。ＶＨＳでも出ているので買いたい気持ちが、また頭をもたげてきた。だが、小澤征爾は、ベートーヴェンでは「第七」を一番得意にしているようだ。前掲のオーケストラとのＣＤも既に出ているようだから（私は、別にそのライブ・テープももっている）。「第九」は二番目に大切にしている曲らしい。いつか、小澤征爾指揮、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の「第九」のＣＤが出るのを期待している。さて、その時、彼はどんな演奏をするであろうか。将来が、とても楽しみである。（2003・1・1）

それでも小橋一夫

小橋　一夫（会員）

★今年、注目するもの‥‥対イラク戦

世の中はよくなるどころか、気がつけば「アメリカの独裁」体制になってしまっているようです。

世界の「知識人」は一体、何をしていたのでしょうか。活動家がコツコツ世直しするよりも、アメリカの動きのほうがスピーディーですよね。もっと強力な方法論がないと、どんどん人が死にますよ。

いまのところ日本の国益のためにアメリカに従うしかない（消極的に戦争協力？）という論調が多いように思います。そんな中、誰に注目すればいいんですかね？

「世界」の厳然たる前提が「ブッシュ体制」だとすれば、それに対抗できる「解答」を用意できないような哲学・思想は「全てダメ」かもしれません。

あと対テロ戦争に意義があると言っていた人、今年は謝罪して欲しいですね。テロ撲滅を掲げて犠牲を出した挙げ句、目に見えてテロは減りましたか？　まるで方向が違うんじゃないでしょうかね。

★今年も注目すること‥‥市民レベルの批判活動

批判されるのが好きな人は少ないでしょうが、だから御互い「平和的に」語りあおうというのは違うと思いますね。「平和的な対話」というのは、はっきり言って「馴れあい」でしょう。内側が「議論」でゴタゴタしているときに戦端をひらくのは難しいはずです。一丸となったら危ないんじゃないですか。

★今年、注目するひと‥‥もちろん「小橋一夫」

こういう御時世ですから、いま批判をやめれば「終わり」だと思います。ところが相手が「名の

有る人」だと、おとなしくなってしまう「哲学愛好家」が、いまもって多いように思うのです。もしかすると、哲学が好きなことと権威主義とは紙一重かもしれません。そういう人に限って、当方にだけは（言論圧殺的に）批判的だったりするようで閉口します。いや、閉口したりはしませんよ。いま口を閉じたら「終わり」ですから。

歯に衣きせぬ批判、これが実践の「基本」じゃないでしょうか。基本、抜けている人が「多い」ですね。

会員紹介

私の関心事　私の問題意識

◆◇◆◇◆2002年度総会への出欠アンケートとともに、会員名簿の作成を念頭に、会員の方々にご自身の関心事などお書きいただくようお願いしましたところ、次のようなメッセージを頂戴いたしました。どうも有り難うございます。しかし名簿作成自体につきましては、慎重な意見や不必要との見方も多かったことから、運営委員会では当面は会員名簿を作成しないことに決めました。そこで、せっかくお書きいただいたものを活かす意味から、このような掲載方法に切り替えさせていただいた次第です。会員の相互交流に役立てて下されば幸いです。掲載は順不同です。（運営委員長）◇◆◇◆◇

●梅田　千種さん

フェミニズム、エコロジーに特に関心を持っています。

性による賃金差別、家事労働の評価、保育所不足は先決だと考えています。

またゴミのリサイクルは地球環境に本当によいのか疑問を持っています。

●宇仁　宏幸さん

資本主義の多様性、日本の調整様式、日本の長期停滞の原因、などを研究しています。

●角　伸夫さん

認識論・存在論・科学史・哲学史・社会主義論・その他、哲学に関するものは何でも興味があります。と言っても、ほとんどまともに勉強したものはないので、いろいろお教え下さい。

●目賀田　文子さん

・実存主義

・戦後処理、差別問題等日本のあり方について

・シモーヌ・ヴェイユ

・マックス・ウェーバー、リースマン、フロム、グラムシ、ウォーラスティン等、山本・田畑両先生が紹介下さった本は、まだ消化できない状態でいますが、非常に面白く読ませていただき感謝しています。

●水田　喜八さん

「明と暗」人間の奥底にある、様々な様相について、いま、世界における、日本の社会における困難な状況から読みとり、考え、行動に反映してゆきたい

●水田　裕子さん

「自由」「人間の尊厳」「人間的であること」などをつきつめてゆくこと。考えたこと、そこから浮かびあがることを行動に反映してゆきたい。

●砂場　徹さん

市民生活からはなれず、真理追求からはなれないよう希望します。ご健闘を！！

●橋本　直樹さん

私が関心をもっているテーマというのは、哲学はもとより、宗教、自然科学、心理学、文学、音楽、美術など、実に多くの分野にわたって数え切れないほどありまして、私はそれらのうち少しでも多くのテーマに取り組んで、その成果を大阪哲学学校で発表していきたいと考えている次第です。どうか今後ともよろしくお願いします。

●山崎　勝代さん

『資本論』を勉強したいと思っています。

北朝鮮による日本人拉致事件について

西山　覚（会員）

このところ毎日のように北朝鮮による日本人の拉致の問題がマスコミで報じられていますが、今回は、このことについて私なりの意見を述べたいと思います。

日本のマスコミによれば「北朝鮮はひどい国だ。道義なき国だ。」と総力を挙げて非難していますが、本当のところはどうなんでしょうか。

確かに、日本人を勝手に拉致して北朝鮮に連れ去ったのは法的にも、人道上も許されるものではありません。

しかし、今回の日本の北朝鮮を見る目や対応の仕方は本当に正しいのでしょうか。

今回の事件に対するマスコミの反応は、この拉致問題の解決なくして国交回復はあらず
経済援助もありえない、というもので、これが日本の世論だとされています。

ここで大きな問題があります。世論とは何でしょうか。国民の世論を形成する上で、マスコミの果たす役割が非常に大きい。そしてもっと言えばマスコミによる世論の形成、マスコミによる大衆操作という重大な問題があります。

今回、テレビやラジオ、新聞を挙げてのヒステリックなまでの北朝鮮非難を行っていますが、このことに関しては、非常に露骨なまでの国家主義と国内の経済問題を外敵を作る
ことによって国内の問題、矛盾から国民の目を逸らせようとする支配層の意図が感じられました。

マスコミの国民の世論形成への影響力は非常に大きいだけに、逆に非常に恐ろしいものがあります。

昭和天皇が死ぬとき、ＮＨＫをはじめ各マスコミが総力を挙げて、天皇が死ぬ時まで病状について連日連夜テレビなどで放送していたのを覚えていますが、あの時は非常に不気味なものを感じました。

今回の事件については、被害者家族の長年にわたる努力—国に被害者家族が働きかけるーが実った例としてマスコミが揃ってその努力を賛美しています。

しかし、被害者やその家族の努力によって国を動かして、謝罪させた例としては、今回の問題の他に、水俣病や薬害エイズの問題があります。

アソシエーション的観点から見ても、これら、水俣病や薬害エイズの問題は、非常に大きな意味を持ったと思います。

今回の拉致事件に関しては、国家と国家の交渉という形をとっており、マスコミも超歴史的に支持し、相対的にではなく絶対的に北朝鮮と日本の関係をとらえ、報道しています。
政府と国民が一体となって交渉すべきだとされています。

ところが、国内の問題についてはそれほど追求されていないように思います。

水俣病の患者や薬害エイズやその他の公害患者についてはどうでしょうか。

これらの人達は、国家によって裏切られた人達です。

今回の拉致事件についてのマスコミによる大衆操作で重要なことは、日本が北朝鮮による被害者だということを全面に打ち出していることです。

しかし、歴史が示しているように、20世紀前半において南北朝鮮は日本の植民地であった。植民地時代には日本人による朝鮮人の拉致や強制連行で何十万という人達が日本へ連れて来られました。第二次世界大戦の時には朝鮮の男性は過酷な強制労働に従事させられ、
朝鮮の女性も従軍慰安婦として一村々の若い女性が日本軍によって突然トラックに乗せられて行かれた一戦地の日本軍の下へ連行されました。

この歴史的事実の重たさを抜きにして、北朝鮮と日本の間に良好な関係、相互の信頼関係が構築されるとは、とうてい思えません。

戦前、戦中での日本人による朝鮮人の被害者、犠牲者は数えきれませんが、これらのことに対して日本政府は何一つの償いも謝罪もしていないのです。

現在の北朝鮮は確かに道義なき国だと思いますが、日本はそれ以上に道義なき国だと言わなければなりません。

第二次世界大戦において日本は、軍国主義の道

を選択しました。そして戦後、諸外国（韓国・北朝鮮・中国など）に対して十分な謝罪もせず、又戦争責任をうやむやにすることに
よって今日の日本があるように思われます。

このように至ったのは、おそらくアメリカが、ソ連軍の日本への南下、占領を恐れ、早急に日本との戦争を終わらせたかったのでしょう。広島と長崎への二度の原爆投下も、天皇制の存続—日本は早急なアメリカの無条件降伏の要求に対して「天皇制の存続は可能か。」とアメリカに打診している–を容認し、それと引き換えに戦略的に重要な位置にある日本を傘下におきたかったのでしょう。

敗戦後、アメリカ軍だけによる日本の占領も、以上の観点からすれば当然のことだったと思われます。

このような理由も含めて、戦後、日本では、正義や道義の通用しない国になってしまいました。

誰も責任を問わない、誰も責任を取らない、弱者だけが切り捨てられる国になってしまいました。

それから、もう一つ重要な問題は、北朝鮮による核兵器開発の問題です。

この問題についても、テレビを通じての各マスコミの報道は日本政府の見解と同じもので、むしろ政府の後押しをしているものでした。

まるで日本には言論の自由があるのかと疑いたくなるほど民族主義的・国家主義的なものでした。

まず客観的現実を見てみましょう。韓国と日本にはアメリカの軍事基地が存在します。

そこにはアメリカの戦闘機や空母やミサイルが配置されています。核兵器の存在についてはアメリカはノーコメントですが、査察をしてないのでわかりませんが、おそらく核兵器の搭載しているものと思われます。

こういう状況の中で、北朝鮮だけを平和を脅かす悪者のように断定するのは片手落ちで、一方的なのではないでしょうか。

核兵器を含め、世界最大の大量破壊兵器を持つアメリカにイラクや北朝鮮を非難する資格はありません。

この問題の解決は、軍事力によってではなく、世界的観点、グローバルな観点から見ていく必要があります。

最も、現実の政治的解決の過程と理論的観点との相違は理解しつつも、やはり普遍的要素を問題解決から締め出してはならないと思います。

現実は弱肉強食であってはならない、現実は対話によって解決されないけれども、武力ではなく対話による平和的解決でなければならない。

多くの犠牲者を伴いながらも質的に、問題解決の能力を高めていく、あるいは高められていくことを通じて、単なる当為ではない平和の理念が実現されていくのではないのでしょうか。

今回の拉致事件を契機として何か日本政府の質的変化を感じることができるように思えます。日本人が北朝鮮に拉致された、という一点に北朝鮮を集中攻撃する、しかも、日本政府自らというよりも、マスコミを通じて国民自らを国家主義的に編成しようとする。その裏には日本の支配層のある種の危機意識とグロテスク～これでもか、といわんばかりの北朝鮮への憎しみに満ちた煽動～な意図を感じざるをえません。（2002.11.10）

大阪哲学学校活動年譜（「通信」前号発行以降）

2002. 10.20.「大阪哲学学校通信」第２２号発行
10.26.　緊急企画・講演会「日朝首脳会談をめぐって」……講師・菊池久彦
11. 2.　大阪哲学学校２００２年度（第８回）総会
11.17.　読書会「愛者（エラステース）ソクラテスの“言葉（ロゴス）”と“行為（エルゴン）”ープラトン『饗宴』を読む」
第１回　報告者・角　伸夫、中村　徹……チューター・永野春男
12. 1.　読書会「愛者ソクラテスの“言葉”と“行為”ープラトン『饗宴』を読む」
第２回　報告者・伊元　勇、中村　徹……チューター・永野春男
12.15.　読書会「愛者ソクラテスの“言葉”と“行為”ープラトン『饗宴』を読む」
第３回　報告者・松尾猛省……チューター・永野

Discussion

「死後はない」とは、世界を道連れに死ぬこと

平等　文博（会員）

Discussion

高根さんと「死」をめぐってのやりとりを続けているわけですが、ときどき読まれた方から感想をいただきます。たとえば、会員の義積さんからは、私が中島みゆきを持ち出し高根さんがプルーストを持ち出したりするものだから、議論が哲学的というより文学的になっているという批判的感想をもらいました。またやりとりを読んでくれた私の知人からは、「せっかちな私としましては“どっちでもいいじゃない”と思わずにはいられません。要は、自分がどういう心構えで生きてゆきたいかという問題ですから、どちらが正しくてどちらが間違っているということにはならないと思います。それゆえ、もっと“唯物論”らしさがほしいなあ、というのが私のリクエストです」という手紙をいただきました。その他、自作の詩を「通信」に提供くださっている上野山さんも、「繰り返し読ませてもらっていて、自分も意見を書きたいと思っている」と言ってくださっています。このテーマに「正しい答え」はないと思います。しかし「よりよい答え」はあるのではないか、いやそれがあるかのように求めることに意味があるのではないかと考えて議論を続けたいと思います。ぜひ読者の皆さんからも積極的なご意見の開示をいただければと期待します。

さて、前号で高根さんは映画『どですかでん』を紹介され、同じ黒沢映画『赤ひげ』との対比で論じられました。高根さんは世評に反して『赤ひげ』より『どですかでん』を評価すると言われます。その理由は、前者には暗に「ヒューマニズムの強要」「規範の押しつけ」が存在するのに対して、後者では「どうしようもない性格破綻者たちを見守る暖かい視点」「寛容さ」があるからだといいます。たとえ社会的にはネガティブと見なされるようなものであるとしても、既成の規範・モラルを押しつけて「内面の自由」を圧殺するような状況を許してはならない、死についてもそれを「わたし」から「わたしたち」へと開く（死の社会化）場合にそうした「権威や強要」（死にゆく規範の押しつけ）が入り込んでくる危険性があるので、あくまでも死をわたしの「内面の自由」の問題として堅持する、つまり「死後はない」と決意する方がよい――だいたいこういう論旨だったと思います。

実は、私はどちらの映画も観ていなかったのですが、年末にテレビで放映された『どですかでん』をビデオに録り、この原稿を書くために観ました。映画の感想はいろいろありますが、それは本題からはずれますので差し置くとして、私には高根さんが紹介されなかった一つの場面と台詞が心にとまりました。

山本周五郎の『季節のない街』を原作とするこの映画は、あるバラックの「街」の住民たちが日常生活で引き起こす出来事をオムニバス風に描いています。その中に、義母が入院しているすきに、どうしようもない飲んだくれの義父による性的虐待で妊娠してしまう娘（義母の姪）の話が出てきます。義母が退院し娘の妊娠が分かっても、元教師だというこの義父は、お得意の屁理屈をこねて知らぬ存ぜぬの無責任を決め込みます。物心ついたころからの不幸な境遇のために、過酷な運命に抗う気力も周囲の世界への関心すらも失い自分の殻に閉じこもってただ黙々と働く、生気のない15歳の娘。そんな彼女にただ一人心を寄せて優しく気遣ってくれていたのが、義父の酒を配達にくる酒屋の17歳の店員でした。

ところが妊娠が分かった直後、娘は傷害事件を起こします。彼女が包丁で刺したのは、義父ではなくてその店員だったのです。被害者本人である店員がかばったために軽い罪でまもなく釈放された娘（その間に施設で中絶手術を受けた）に、ばったり道で出会った彼が尋ねます。以下、映画の台詞とほぼ同じですので、原作中の「がんもどき（実母が！娘につけたあだ名）」と題する章から引用します（新潮文庫版、p.259）。

「どうしてかっちゃんあんなことしたの、ねえ、どうしてなの」

かつ子はまた少年を見あげ、その眼をまた伏せながら、死んでしまうつもりだったと答えた。

「死ぬ気だったって、かっちゃんがかい」

かつ子は頷(うなず)いた。岡部少年は首をかしげた。

「わかんないじゃないか、自分で死ぬ気で、それでぼくにあんなことをするなんて、どうしてさ」

かつ子はじっと考えてから、うまく云えない、と云った。いま考えてみると自分でもよくわからない、と云った。ただ死んでしまいたいと思ったとき、あんたに忘れられてしまうのがこわかった、自分が死んだあと、すぐに忘れられてしまうだろうと思うと、こわくてこわくてたまらなくなった、本当にこわくってたまらなくなったのだ、と云った。

娘は、自分の死によって自分の存在が完全に空無化することにどうしようもない恐怖を覚えたわけです。彼女がただ一つ死後の希望を託せたのは、この世でただ一人自分の存在を認めてくれたこの少年の記憶の中に自分が生き続けることだったのでしょう。しかしあまりにも影の薄い自分の生の記憶とこの少年がいつまでも共に生きてくれるのを期待することなど到底できない。自分は少年からさえもすぐに忘れ去られてしまうだろう、と……。

彼女にとって唯一意味のあるリアルな世界は少年の存在でした。そもそも人間らしい存在を自分に認めようとしなかった実母や伯母夫婦(義父母)たちの世界は、自分には初めからあって無きがごとき無意味な世界です。少年だけが、人間として限りなく無化させられようとする自分を有につなぎ止めてくれていた。彼女が生きようとしている限りは、少年の存在は娘にとって自分の生(有)をただ一つ確認し根拠づけてくれるものだったのです。しかし、「死んでしまいたい」と思った瞬間、少年の存在はまったく別の意味をもって彼女の意識に立ち現れてきます。つまり、自分の死(無)を確認し根拠づけるものとしての少年の存在です。少年がいなければ、すでに人間として「無」であった彼女が、生物として「無」になることに、いかほどのへだたりもなく、また何のおそれもなかったに違いありません。けれども、少年との関係において彼女が感じた自分の人間的存在、そのわずかであれ確かに感じた「有」の意識が、死による空無化を途方もなくおそろしいものと覚えさせたのです。

彼女はそのおそろしさにたまらず、少年を刺し殺そうとする倒錯的行為に出ます。死の恐怖という人間的感情を自分に目覚めさせた少年の存在、彼の記憶からすぐに消し去られることを想うと自分が無になってしまうことの恐怖を堪え難くリアルに覚えさせる少年の存在――それを否定することなしに彼女は死ぬことができなかったのです。

この娘の行為は、いわば世界を道連れにした無理心中と言えるかもしれません。有と無、生と死という相対的存在の一方を否定することで他方の意味を空無化する。有の世界(娘にとっては少年)を無くすことで無(娘の非存在＝死)はその意味(おそろしさ)を失うのです。高根さんとは違った意味においてでしょうが、彼女は「死後の世界はない」と決意したわけです。

高根さんは、ある一定の死に方だけがヒューマンなものとされて、それが押しつけられることを懸念され、社会的価値に還元できない個別的で多様な死のあり方を認めることが必要だと主張されます。そのこと自体に私も異論はありません。規範や権威の強要への対抗原理として「内面の自由」を主張することにも異論はありません。けれども生と死の問題を、個の「内面の自由」を第一にして論じることができるのだろうか、というのが私の疑問です。

先の娘の場合も、生と死の意味を覚えたのは少年との関係においてです。しかしほとんど口もきかず感情も表さない娘と少年との関係は、時たま少年が彼女に「大饅頭」を食べさせ、「妙見様」に誘って少しばかり話をするという、「関係」というにはあまりにも希薄で弱々しいものでした。その関係(人と人との交わり)の貧しさゆえに彼女は自らの死を無としか考えられず、「死後はない」と断念せざるをえなかったのです。

私の死によって私の存在は決して「空無化」してしまうのではない、私の死後にもこの世界(死後の世界)はなお存続し、そこに私もつながっていくのだという自覚と気遣いは、私が生きているなかでの他者との関係性によって生まれ、その内容を獲得するのではないかというのが私の考えです。それが「自由な内面」のベースにもなるのだと思います。

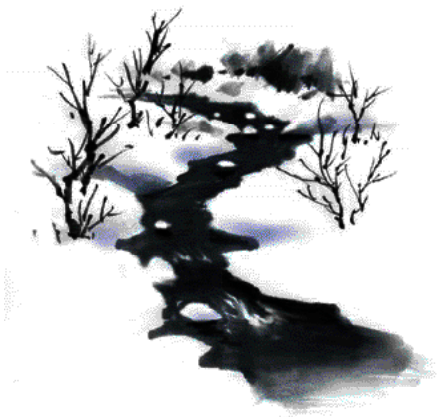
高根さんが出された「死に方の強要」ということは大事な問題ではありますが、少し傍流(問題にすることの価値という意味でではなくテーマそのものの意味で)へと話題が向けられたかなという印象もあります。私の誤解があれば正すことも含めて、高根さんの続論を期待しています。

毒と身体

伊元　勇（会員）

あらゆる食べ物に毒が混じってしまった恐ろしい時代になった。農薬・添加物・毒物がありとあらゆるところに拡がり、避けられなく毒を食べ続けなければならない。死ぬことが何時になるのか分からないのは仕方がないにせよ、その時まで出来ればその毒で苦しまないでいたい。そしてもし可能なら長生きが出来、しなければならないことが出来れば言うことはないと、誰でも普通そう思う。肉体の健康は適切な栄養と運動といわれる。それは適切な排泄も促すためである。便秘も毒である。毒でない、毒の少ない物を選んで食べることと同時に、毒を出す解毒作用の役割を果たす肝臓も強くしなければならない。日頃から肝臓を痛めている人は解毒作用を弱めていることになる。毒の排泄より毒の取り込みが多ければ当然、その毒は肉体に蓄積し、細胞を死に至らしめる。であるから運動等の肉体のマッサージや入浴で汗をかき新陳代謝を高め、清潔に努めることはとても大事である。そして理想的にいえば内臓そのものを物理的にマッサージ出来ればいいのだが、そんなことは普通聞かない。しかし昨年の合宿以来、私が皆さんにお勧めしているヨーガ（ハタ・ヨーガ）ではその方法がある。

孔雀のポーズ（マユル・アーサナ）は両手で物を受け取る形に指を拡げ、受け取った物を床にそっと置く形から、手のひらを向こうへ倒すように床につける。その時指は自分の方に向かわせている。腕のスジが伸ばされている。両肘も合わせそのまま自分のお腹に載せ、全身が床と平行になるよう足を浮かし、バランスをとる。初心者には難しいポーズである。必ず足が床から離れなければならないわけではない。力とバランスの有り様が同様であればよい。このポーズの名の由来は孔雀が毒虫を平気で啄むように、解毒作用を見立てたものともいわれている。肘が肝臓を圧迫し変形させる。しばらくそのポーズを保持（我慢出来る時間）した後、急にではなくゆっくりと元に戻る。そして例の屍のポーズ（あおむけ大の字で脱力）で全身をリラックスさせる。この時肝臓は加えられていた圧迫から解放され細胞組織の賦活が進み、滞留していた毒等の分解物は新鮮な酸素と栄養と交換され、活発に排出されていく。再び加えられるかも知れない圧迫に充分耐えられるよう細胞は丈夫に活性化される。このように生命力が引き出されていく。また腹筋と背筋は強められ背骨も伸び、姿勢の保持が強化され良くなる。背中が丸くなるのを防ぐ。これはその場で出来るきわめて強力な全身運動である。やり続けられれば必ず出来るようになる。是非一度お試しあれ。



大阪哲学学校として、今回の古典講読はあらゆる意味において、今までにないヒット策であったと私は思う。ともすれば現実主義に陥りやすい日常諸般の情勢からみても、現代の人間が流れやすい緊迫と惰性があるにせよ、いまいちど、古典をかえりみる余裕とふるきを訊ねて新らしきを知る精神を喚起し、ふるいたたされた感もある。

何分にもプラトンには足を踏み入れたばかりで、私には彼の深遠な哲学にたいして口をはさむ資格もないが、饗宴をひもとき彼のEROSに対するイデアは私なりに把握、つかんだ筈である。そのおおもとがソクラテスにあったことを考慮しながら又とないいい機会であったことを付言して稿を閉じたいと思う。なによりも知を求め、知を愛する哲学精神の原点に久しく戻れたことに、敬意と謝意をこめて。

愛者ソクラテスの言葉と行為

–プラトン『饗宴』EROSを読んで　われわれはそこから何を学ぶのか

昨年の11月17日より、三回に分けて哲学学校では、プラトンの『饗宴』をチュウター永野春男(大阪工業大)氏のゼミで受講した。開講案内パンフによれば、24年前、大学卒業後のある知人が自殺した時、もし彼が生きている間に、饗宴を読んでいれば自殺などしなかったであろうと九鬼周造氏はその「書斎漫筆」の中で述べている。また外交官志望の彼が哲学へ転向した動機の一端がこの饗宴であったとも述懐している。

それほどに饗宴を熱読した彼であるが、われわれも初めてこのテキストをひもとき、いまだ、遼遠としたなかにも何か解きがたいなかに、気高きものをひきつける魔力にとりつかれたことも事実であろう。

永野氏は本書は読み終えただけでは済まされず、むしろ読了後から本題の課題が始まるの如く、私もまたその思い強く、たどたどしい思いではあるが、今一度本書をふりかえって考察の思いに駆られたのである。

その手筈をととのえ確認のため、先ず『饗宴』のおよその成り立ちから話を進めよう。

EROS、つまり愛の問題を宴席においてやったのがシュンポシオン、これは「共に飲む」の意でギリシャでは食事を終えて後、ワインを飲む習慣があり、飲み食いは単に肉体の栄養であるだけでなく、飲んで語ることは精神の糧になるという考えもあった。西暦前400年において、既にこの風習があったことに、われわれはまず驚く。

話は先ず五人のEROS讃美から始まるが、間接話法を取り入れ、また話者が16年前の悲劇詩人アガトン宅で開いたものを列席者が当時の模様を話者に語らせるという手の込んだ手法で、これがまた奥行きの深いダイナミックなものとなって、それがあたかも昨日あったような雰囲気で読者を誘いこむのである。(対話者はアポロドロスとアリストデモス)

プラトンの饗宴を書く動機はいったいなんであったのか。我々も一番知りたいところだが、ソクラテスの死後に書かれたものであるだけに、彼の追慕してやまないソクラテスへの思い、その愛の化身を観たということや、当時しばしば論ぜられた少年愛の慣習、また彼自身、愛者であったディオンへの愛が根底にあったことも想像にしくはない。「ディオンよ, 汝は愛もてわが心を狂わしめる。」の言葉からも容易に推察できるであろう。

ストーリの前節は五人のEROS讃美、中間にソクラテスとディオテイマの愛の説、最後はアルキビヤセスのソクラテス讃美となる。

「そこな　アルキビヤデス待たんかい」読者はこのセリフによりストーリのなかに漸く腰を落としていく。

やがて饗宴の館アガトン宅へ行くまでの道中に、この話がいつあったのかをアポロドロスの友人によって初めて知らされる。友人はあたかも昨日の話かと思っていたが、実は子供の頃の話で、そしてその話をしたのはアリストテレスとか言ういつも跣の小柄な男で会合にも出ていたという。アポロドロスは「丁度よい、それじゃ街へいく道中で話してくれないか」ということでこのストーリは始まるのだが、この長くて重厚な話が道中だけで語れるはずもないものだが、プラトンはその点何も触れてはいない。読者もそれをことさら気にもせず、深遠な話の内容に引きずりこまれていくということである。

ファイドロスはミュリノス郷の人でソクラテスの弟子でもある。EROS讃美の序幕はこの人の「EROSは偉大な神である」の語り口から始まる。その謂れは神々のうちで最も古く、かつ両親というものがないのだと嘯く。

そのプロローグで如何にもそのリヤル感に誘われるのは、ソクラテスの立ち振舞いで、彼は沐浴を終えて靴をはいたソクラテスに出会う。「そんなにきれいになってどこへいくのか」に「アガトンの所さ、こんなにオシャレをしたのは美しい人のところへ、美しくなっていこうと思ったからなんだよ。----ところで君は」と彼はいった。「その饗宴に行く気はないか」「あなたの仰るとうりに」「じゃあ、ついてきたまえ」こんなやり取り

のうちにアリストデモスは彼と一緒にアガトン宅に行くのであるが、彼が先に着いてもソクラテスの姿はいっこうに見えない。アガトンは給仕に探しにやる。給仕が戻ってきて、ソクラテスは脇へそれて隣の玄関先で立ったまま、お呼びしてもいっこうにはいってきません、という。ほっておいてはいかん。もう一度呼びにいってくれと頼むと、アリストデモスは「いけない、いけない」と叫ぶ。「あの人はほっておいたほうがいい、それがあの人の癖なんだから」
やがて、ソクラテスはやってきた。アガトンはこちらへ私の隣に座りなさい。あなたにさわって隣の玄関先で浮かんだ妙想の御裾分けにず預かりたいに彼は「それは好都合だろうね、智慧というものが、ちょうど盃の水がたくさん入っている方から羊毛の糸を通して少ないほうに流れ込むように、われわれも互いにふれあっていれば満ちたものから空の方へ流れ込むものだったら、僕は君の隣を大いに尊重するよ」なんと功絶でうるはしい言葉なのか。ソクラテスという男の片鱗をこのセリフからも伺うことができる。傍線の言葉は二千四百年後の人間にとっても新鮮で垢抜けした言葉の響きをわれわれに与えるのは何故なのか。先を急ごう。

神統記ヘシオドスによれば、はじめにカオス(混沌)次に広胸のガイヤ(大地)とEROSの順である。

この古い神は最大福祉の源泉であり、恥ずべきことはその暴露を愛する少年に見られる時ほどたまらないことはなく、相手の為に死のうと思うのは愛するものだけである。

かくて、EROSは神々のうちで最年長者であり、最も崇敬すべきであり、また徳と幸福の獲得に最も権威ある指導者であると結論づけたのである。

次に登場するパウサニヤスはEROSの２種説を。彼はEROSをはなれてアフロディテ(愛と美の女神)はなく、愛と美の女神は２種あると。ウラノス神の娘でもう一方はゼウスとディオネとの間で万人向きと呼ぶ。そして、EROS自体は美でも醜でもなく、むしろその行動が如何になされるかにより, 性格も決まるという。即ち、美しく、かつ正しくなされた場合は美しく、正しからぬ場合は醜いと。

次に恋に落ちた場合、彼らは魂よりも肉体を愛し、最後に愚昧なるものを愛すると。彼はあえて言う。それはただ目的の達成のみ眼中において、その仕方が立派かどうかを意に介しないからである。それはこのEROSがもうひとりの女神よりも年少で、その生まれの上からも女性と男性に預かる女神から出ているからであると。

そして、他のEROSは天の娘でこの女神は女性にあずからず、ただ男性のみにあずかり、放縦に流れることがない。それは彼らが生来強きものと、理性に富める者を愛するからであると。事実これらの人は少年に智慧がつき始める頃までは愛することをしない。漸く髭が生え始める頃(これはあの陰毛がはえるころであろうか)をいい、この頃から愛し始めた人々は全生涯を通じて、その愛するものから離れることなく、愛人を欺いて捨て去ることがない。この種の少年愛を禁ずる法律さえもとの声もあるくらいで、なぜなら、究極において、その善悪は不確かであるからである。

われわれは、ここでプラトンのEROSに対する理念の片鱗を読みとる。つまり万人向きの恋は魂よりも肉体を、快楽といってもいいし、自己愉悦といってもいい、その目的の達成のみ眼中においてその仕方が立派かどうかは意に介しないからであると。

また、あからさまに愛するのはひそかに愛するよりも美しく、しかももっとも高貴にもっとも優秀なものを–たとい彼が他のものよりも面貌が醜いにせよ–愛するのは美しいとされていることを。

ここの意味するものは何なのか, 愛はあからさまではないないのが世の慣わしからみればあえてそれを覆すなかにこそ、高貴でかつ優秀となりうるのか、このあたりも何か瞭然としないものがある。

かく言ったあとにパウサニヤスは悪しきものとは魂よりも多く肉体を愛するかの卑俗なる愛者をいい、永続する対象でないからその愛した肉体が花時をすぎるや、あらゆる言葉と約束を踏みにじって彼は急いで飛び立ってしまうからであると。

これに反し,気高き性格を愛するものは、生涯を通じて変わることがない。それは永続するものと融合しているからで、また彼が最後につけくわえたのは徳のための行為、これすなわち天上の女神に属するEROSであると。

パウサニヤスは大体以上のことをいって演説を終えた。次にアリストファネスの番であったが彼がクシャミが止まらなく、医者のエリュキシマコ

スが代わった。

エリュキシマコスは医者の立場から、調和と不調和、節制の強調とその範囲は全自然と芸術にも及び、幸福をもたらすのは真誠のEROSと述べる。この彼の説が後半のディオティマの説につながる。エリュキシマコスの次にくさみの止まったアリストファネスが語った。

彼は　人間の性には三種あったと、つまりいまの男女の両性だけでなく、両者の結合したもの、その名称は残っているもののそれ自身消滅したものをあげる。

おめ(男女)というもので、その姿は球状、背と脇腹が周囲にあった。四本の手と同数の脚、丸い首の上に顔が二つ、彼らは恐ろしき力をもち、その気位の高さは異常で彼らは神々に挑戦するにいたった。

そこで、ゼウスと他の神々は対策を協議した。彼らを殺してしまえば神々を敬うものがいなくなるということでそれはできぬ、そこで考えついたのが、人間を弱くするために真っ二つに切断、二本足であるくことを。そこで髪で卵を切るように切断、彼は人間の顔を回転させ、四方八方から今の腹のほうへ皮を引き寄せ、ひも付き財布のように腹の真ん中へ絞った口元が今の臍となった。

『かくて我々はいずれも人間の割符、シュンポロンにすぎぬ。ひらめのように切り割られて、ひとつのものが二つのものとなったのだから、人は誰でも自分の片割れなるものを求める。かっておめ(男女)と呼ばれた双形者のいちはんの男たちは全て女好きである。大多数の姦夫はこの種族から出たが、男ずきな姦通家の女たちもまた同様である。しかるに女の片割れなる女たちはすべて男たちには興味がなく、かえって女に心を寄せる。また同性愛者もこの種族から出る。最後に男性の片割れなるものはいずれも男性を追いかける。そうして、少年である間は一彼らはもともと男性の片割れだから—成年男子を愛し、またこれと一緒に寝たり、抱擁しあったりすることを喜ぶ。しかもこれこそ少年や青年のもっとも優秀なものである。なぜなら彼らはもっとも男性的な者だからである。なるほど世間では往々彼らを無恥だという者もあるがそれはあたらぬ。彼らをそうさせているのは無恥ではなくて、むしろ大胆と勇気と男らしさである。』

アリストファネスはかくいって、われわれが愛の目標に到達し、あらゆる人が昔ながらの本性(原形)に還元しつつ自分のものなる愛人を獲得するとき、ただその時にのみ人類は幸福になることが出来るといった。しかも、それは我々の心にかなう種類の愛人を見つけ出すことであると。アリストファネスもまた後半のディオティマの説に結びつく幸福説の前ぶれである。

彼の後にアガトンの番が来て、今までのEROS讃美は如何なる性質のものであるかを語っていないと指摘、そこでEROSの本質を讃美し次にその賜物に及ぶ。

彼はファイドロスのいった最年長者に同意し難く、むしろ最年少者の神々であると主張。

そしてEROSは粗こうなる心情を素通りし、柔軟なものに宿ると。

かくて、EROSはもっとも若く、もっとも柔軟なものであることを結論付ける。

次に、EROSの徳について強制により受苦する物でなく進んでEROSに奉仕することを説き、国家の君主たる国法もこれを公正と宣言する。

さらに、EROSが関与する所の徳は自制であると。なぜなら自制は快楽と情欲との支配を意味し、EROS以上の快楽はひとつとして存在しないことは世間も認めているという。

かくて、EROSは自らもっとも美しく最もすぐれたるもの、また他のものにもまた同じような長所を付与するものと思う。EROSは柔和ををもたらして、粗暴を遠ざけ、慈悲深く、賢者には驚異であり、神々には驚嘆せられる。以上がアガトンの演説概要である。

シンポシォンはいよいよ本番のソクラテスを迎えた。彼は開口一番、EROSは何者への愛なのかアガトンに向けて問う、勿論あるものへの愛であるが、その愛が向けられるものを欲求するかと。それはまた、所有する時か、せぬ時か。所有せぬとき欲求するものはその欠いているものを欲求するかと。

『ところがもしEROSが美しきものを欠いており、しかもよきものが美しいとしたら、

彼はまたよきものを欠いていることになるね』そこでアガトンをを開放した。

ソクラテスはある外国マンティネイアの婦人であるディオティマ(愛のことに達人)を登場させ、彼と彼女とのやりとりをことこまやかに披瀝する。これはプラトンの創作という説もあるが、色々示唆にとんだ会話がソクラテスとの間に交わされ、われわれはあたかもそれが真実交わされた

ような情景の中に想像の世界を漫遊し、EROSの本質、性格、人間への思いに一瞬たちどまざるをえないのである。

ソクラテスはEROSは偉大な神であり美しいものに対する愛であるといったとき、彼女はEROSは美しいものでもなければ善くもないといって彼に反発したのだった。

彼女はあなたは美しくないものは醜くて悪いというのですか、それからまた、智慧のないものは無知なのですか、それともあなたは、智慧と無知の間には一種の中間物があることに気がつかないのですか。明らかに知見と無知との中間に位置するものと見るべきです。

EROSが偉大な神であることは万人が認めているというと、EROSが神であることすら容認しない人たちがどうして偉大な神と認めますか、それは誰のことに、そのひとりはあなたでもうひとりは私という。どういう意味ですか彼は尋ねる。だってあなたは容認したじゃないですか。EROSは美しいものや善いものを欠いているからこそ、その欠いているものを欲求するのだって。

では美しいものにも善い者にも預からぬものが、どうして神であるはずありましょう。

決してそんなはずは。それ御覧なさい。あなたもEROSを神だと思っていないのでしょうと、彼女はいった。

このような会話の後、EROSとはいったい何か、滅ぶべきものかに。滅ぶべきものと滅びざるものの中間にある者ということで、偉大なダイモ—ン神霊に落ち着く。そしてその能力とは人間から出た言葉を神々へ、また神々からきたことを人間に通訳、伝達するのです。

愛するものが美しいものを愛する場合彼は何を欲求するか。「それが自分のものになること。」彼は答えた。では善き者を手に入れるとその人はいったいなんのうるところがあるか、「その人は幸福になる。」彼女は答える、よろしい。私たちの答えはこれで終極に達したと。先にいったアリストファネスの幸福説がここでつながる。それに付け加えたことは、愛とは善き者への永久の所有に向けられたものということになる。

そして愛の目的が究極において「不死」にあり、あらゆる動物が性埴欲に襲われる時どんなにひどく興奮するか。次に生まれたものに対し、子の為なら強いものに戦っても命を捨てることさえいとわない。愛の目指すものは動物の場合も同じで、滅ぶべきものの本性は不死を願うべきものであり、それはただ生殖によってのみ達成されるのです。生殖とは古い者の代わりに新しいものを残していくことですからです。

さてと彼女はつづけた。肉体上に旺盛な生産欲を持つものはむしろ婦人にむかう、そしてその恋愛の仕方は、信ずるところでは『未来永劫に自分を確保しようとする。』ところが心霊に生産欲をもつものは、知見やその他あらゆる徳、それを算出するものは一切の詩人と独創者の名にひする名匠たちである。そこで彼は生産欲に燃えているので、醜い肉体よりも美しいのを喜び気高くてかつ天凛の優れた魂にめぐり合えことあれば非常に歓迎するでしょう。傍にいても離れていても、彼はその人のことを思い,出生したものをその人と共に育て上げる。その結果こういう人は肉親の子供がある場合よりも、はるかに親密な共同の理念と友情により互いに結び付けられると。

そのためには心霊上の美をば、肉体上の美よりも価値の高い物と考えることが必要です。

今漸く愛の道の極地に近づく時、一種驚くべき美を感得するでしょう。ソクラテス今までの苦労もそのためであったといえるそのもの。それは常住にあるもの、生ずることもなく、滅することもなく、増すこともなく、一方から見れば美しく、他方から見れば醜いということもなく、——むしろ全然独立自存しつつ永久に独特無二の姿を保てる美そのものとして現れるでしょう。

プラトンの主張する「愛の哲学」のイデアがこのあたりにあったことをわれわれ観ることが出来る。訳者、久保勉氏もその序説にイデアとはもはや単に抽象によって得られる概念でなく、むしろ有限なる諸現象の本体かつ原型として時処を超越する不生不滅の実在であると表現し、これこそフィソロフィア即ち智慧の愛求であり、道徳、知識的にも人間向上の最高段階であると。

生がここまで到達してこそ、親愛なるソクラテスよ美そのものを見るにいたってこそ人生は生甲斐があるのです。——美を見る人は徳の影像よりも彼の補足する影像ならぬが故に——真の徳を産出するに成功するとは考えないですか。

このようなことをディオティマは話してくれ私は説得された。それで私は人生にとってEROS以上によき助力者はないということを他の人々に納得させるように努めるべきと考える。人はまたEROSを尊重せねばならぬと。私自身も愛の道を

尊びかつ何よりも熱心に練習もしているし、他人にもそれを勧告している。

ソクラテスがこう語り終えると一同は彼を賞讃した。それから間もなく庭から酔っ払ったアルキビでアスの声が聞こえてきた。

これから後はソクラテスの愛者アルキビヤデスのソクラテス讃美の演説が延々と続くのであるが、このシンポシオンにおいて、このアルキビヤデスの行動やソクラテスへの思いが全てから回りする両者のあいだの恋物語を我々は聞かされるわけだが、このシンポシオンに於いての愛の主題、その本質的な面からはなんら示唆的なものも見られないし、概して言えば、愛者と愛人との間のすれ違い、それはソクラテスの愛に対する処し方、彼の愛に対する捉え方、そのイデアなるものにも我々は甚だ漠としたものしか感じざるをえなかったのである。

その一こまを列挙すれば、彼はソクラテスの前で真実を語ること許してくれるかと、前置きして語るのである。先ず彼はソクラテスはシノレスの坐像そっくりと指摘、そのあとこの人に対してだけ感じる恥辱、あなたの命ぜられることをする必要はないといって反対すること出来ないこと。また、いつも美少年を愛し夢中になっているがまた一方では万事に愚鈍であり、何一つ知らん顔をしている。ひとたび内部を開いたならば自制心の塊、列席者の諸君想像しえるだろうか。よく聴いてくれ。この人はどんなに美しい人に出会っても全く無頓着である。むしろ信じ難いほどこれを蔑視する。また金持ちに対しても、また他のどんな優越面を持つものに対しても、この人は一切の所有は無価値であり、また我々も無に等しいものと考えている。

僕はソクラテスの求めるものならただなんでも実行せずにいられなくなったのである。こうして僕は諸君、この人と立った二人きりになった。そこで僕はこの人がすぐに愛者がその愛人と差し向かいに語る時のように、語りだすだろうと思った。そして喜んだのだったがところがそんなことはまるっきり起こらなかった。

僕はこう考えた。もっと手厳しくやらなければ駄目だ。僕は食事に誘い愛者がその少年を誘惑する時と同じように、が、それには応じようとしなかった。しかし二度目にはひとつの誘惑策をめぐらし、食事が済むと深夜まで彼と語り続けた。それから彼が帰ろうとしたときあまり遅いのを盾に引きとめた。ソクラテスは食事の時にも横になっていた。

またその部屋には僕たち二人のほかは誰もいなかった。

さてとアルキビヤデスはいう。ここまでは誰の前でも語れるが毒蛇に噛まれた者の心境は自ら噛まれた者の以外には誰も話して聞かせることを好まぬものであると。

それは苦悩を味わったものしかいいあらわされないものであり、噛まれた一番いたい箇所、心臓か魂の逃げどころのないものであった。

そこで僕は回りくどいことをよして腹蔵なく自分の胸中を打ち明ける時期が来たと思った。

僕は彼を揺り動かし、「僕が何をたくらんでいるかお分かりですかと。あなたは僕に一番ふさわしいたった一人の愛者なのです。そしてあなたは僕に打ち明けるのを躊躇されていると思われるのです。僕にとって出来るだけ優秀な人間になること以外にないのですから。」これに対しソクラテスはいった。

「愛するアルキビヤデス、僕が本当に君の思うような人間であったのなら、そして僕のうちに君を向上させる何かの力があるのだったら、もっとよく考えてみたまえ。僕には何の価値もないということに君が気づかないといけないから。実際理知の視力は肉眼の視力がその減退期に入ると、漸くその鋭さを増し始めるものだが、君はそこまでまだ遼遠だ。」

僕はいわば矢を放ってしまったのでソクラテスも傷ついただ゛ろうと思った。そこで彼に一言のすきも与えず僕の外套を彼にかぶせ一緒に横になり、両腕をばこの心霊的な驚嘆すべき人にまきつけて一晩過ごしたのだった。

僕はあえて神々と女神たちに誓う。僕はその一夜ソクラテスと一緒に寝て過ごしたが、自分の父または兄といっしょに寝たときとなんら変わった事はなかったのである。あとはアルキビャデスの毒蛇に噛まれた者の悲哀、徒労の感触を読者に与え、読者はまたそれを読者なりに噛み砕くしかないのである。

実際この人にあっては、ただ外部からまとうた仮装に過ぎず、ひとたびこれを開いたならば、その内部が如何に自制心に満ちているか。諸君は果たして想像しうるだろうかのアルキビャデスのことばが読者の胸に跳ね返ってくるのである。

さて、その後の僕の気持ちはどんなだったと思

う。実際一方では侮辱を受けたと思いながら、他方ではこの人の資質、その自制力、勇猛心をを讃嘆せずにいられなかった。

かくて僕は途方にくれて、前代未問の奴隷状態に堕して落ち着きもなく、ただ歩き回っていたのである。

彼の告白には味わったものしかないその真実性が秘められているように思える。ここでわれわれはまた、ソクラテスという男の内面性や、その人間の想いに否応なく駆り立てられる。いったいソクラテスとは何者であったのかという問いかけは追えば追うほど際限もなく続くのである。

その後、彼はポティタの戦役にソクラテスと一緒に参加するが、ここにみる数々のエピソードの糧道を断たれてもその辛抱強さは群を抜き、厳寒の戦場でも跣で氷の上をあるいて平気であったとかには肝を冷やすが、考えに耽りだすと終日夜を徹して太陽が昇るまで立ちつづけていたという話、また、負傷した彼を見捨てようとせぬばかりか、助け出し指揮官の褒章も受け取らず貰うのは君のほうだと進言して彼に譲ったという話、ソクラテスについてはなお他にも驚くべき賞賛の事例は数え切れず,古人のうちにも、今の人の中にも彼に似た人間は皆無という。で結局、僕のしたように彼をその人物、並びに言説を、人間と比較することをやめて、シノレスやサティロスに比較するより他ないと彼をして言わしめるのであった。

ということは、彼をして神の再現とみるのか、シンポシオンに見るソクラテスの幻影はその超俗、超人間的活動とみなければならない数々の衝動やふるまいには、普段の人間思考の余地を凌駕することをわれわれはひだに感じたのである。

何より、無実の罪で有罪となり、クリトンの逃亡の手筈も無に帰し、自ら毒杯を呷っていさぎよい死を未練もなく決行の先には、彼しか知ることのない世界への希求と憧憬が彼をしてあのように急き立てたのかもしれない。それ故に一旦其れがとりつくと昼夜も待たず立ち続けるという奇異な行動(神霊)の世界も彼のみが知りえる世界であった。

私はそれをキリストの再現に重ねてみたが、キリストよりも彼のほうが先であったことに気ずき、ただ茫然とするばかりである。

【12頁右下段へつづく】

【18頁よりつづく】

Poème

委員会

上野山　定由(参加者)

安アパートの一室にあつまった顔ぶれは何時ものとおり
議題は　隣の人を自分のように愛せよ　という言葉の処置で
抹殺してしまうか　それとも　このまま放置しておくかである
いっこうに誰も発言しない　このままで閉会かと思っていたら
だいぶ酔のまわっているのが喋りだした

隣の人を自分のように愛すれば
一かけらのパンでも　半分は隣の人に
それで生きのびればよいが　ゆきつく所はともだおれ
隣の人を自分のように愛さないで　全部ひとりで食べた
そのお陰で　自分は生き残れた　隣の人は餓死
隣の人を愛さなければ　ならないものなら
どのように隣の人が苦しんでいても　自分は痛くも痒くもない
というように　神経が各自持ちにつくられる筈がない
つまり　生きているものは　隣の人を自分のように
愛さないでも良いように作られている

神経が　三〇億年余りのあいだに
簡単なものから　現在のようなものに成ったのも
なによりも自分を愛するという　至上命令に従ったればこそである
それが　ここ二、三千年まえ頃から奇妙なことに
自己放棄にも　つながり兼ねないことを意識するようになった
神経の使命は自己保存である
それを疎かにして　叛旗をひるがえすものが出てきた
これこそ真の革命であり　厳粛な革命だという者もいるが
馬鹿々々しい　自分の首をしめるのが革命か
隣の人を自分のように愛せよ　という
この意識　この言葉は　絶対に抹殺しなければならない

ろれつの回らない口で　ここまで喋ると居眠りをはじめた
ほかに意見がなければ採決をと見まわしたが
私語をかわしたり　あくびをしたり　大半は居眠りをしている
注いでくれてあるコップ酒を一口のみ　報告書を書いた
真剣に討議するも審議未了

顔色の脱色～２重の意味で～

小橋　一夫（会員）

「顔」について語りたいと思います。

ぼくの「切り口」は、なんといっても“性”ですね。

まちがっても「顔を失う」といった“匿名性”の問題を切り口にはしません。

なぜなら、顔の見えない都会人の「画一化と孤独」といったテーマのもっていきようは“今日的”ではないと思うからです。

たしかにインターネットでは「匿名性」はキーワードでしょう。しかし、匿名であることは、「しがらみ」に取り巻かれた一般多数には、むしろ居心地のよいものでもあるはずです。そして、名前（知名度）とアイデンティティー（肩書き）の有る人の力に押されないためにも「匿名の場」というのは有り、だと思います。

（※匿名による参加と、参加時の署名とは別問題で、どちらも必要な場合があるでしょう）

さて、「顔」という言葉から真っ先に思い浮かべるのは何でしょう。たとえば、それは「体面」ということかもしれません。

少しひねってみましょう。「顔写真」という言葉ではどうでしょうか。

“真面目”な人は、履歴書や免許証、新聞などを思い浮かべるかもしれません。

ところが、不真面目（？）な「多く」の男性にとって“顔写真”とは「性」そのものかもしれません（顔邪心？）。

この場合、顔写真の価値の序列としては、たいてい「カワイイ女　＞フツーの“若い”女　＞それ以外または男」の写真、ということになるでしょう。これは裏を返せば、女性がコミュニケーションをとる場合、顔写真が物を言うということだと思います。

さらに“裏返して”かんがえると、「顔」が無い「性」は、ちょっと考えにくいのです。

男性のかたに当てはまると思いますが、もしその人が“フェチ”でなければ、たとえば「顔を隠したエロ画像」では「盛りあがらない」でしょうね。（これは背理法？）

そういう男性側からの「需要」の結果かどうか、いまでも女性のほうが、容貌（つぎに肢体‥‥姿態）の交換価値のほどをよく理解して、積極的に自己“商品”化に努めているのではないでしょうか。（通販写真の飾りたて？）

〔ちなみに、そういった自意識のなせるわざなのか「同性」間では、顔写真のトレードという“プリクラ文化”は健在で、むろん、プリクラが具体的には写メール（一般名詞としての）というかたちで“一億総電話時代”に受け継がれていると思います〕‥‥

多くの場合、男女が「性的ユニット」（自発的・目的的・対等な立場のユニット）を組もうとすると、インターネット（という今日的なコミュニケーション市場）では、顔（デジカメ）・性格（メール）を通して品定めをすることになるでしょう。これは或る意味「健全」なのではないでしょうか。あるいは「純粋」と言い換えてもよいかもしれません。

ところが、一般多数ではない場合、“社会的地位が高いとされる”人が、諸々の「コミュニケーション市場」において“性”を物色するときは、少々事情が違ってくるでしょう。そこには色々と“力学的な挟雑物”が入ってくる可能性があります。

言い換えましょう。“英雄イロを好む”といえば笑って許せても、“財は色を好む”もしくは“地位は色を好む”というとどうでしょうか（すなわち最大の「性の自由」は“力”に開かれている）？

「社会的地位の高いとされる」人たちは、人によっては桁ハズレに“豊かな”性体験をもちながら、己の「コミュニケーションの実態」と、性の「実生活」とを語ってしまうと“体面”を失う人が多いのかもしれません。そうであるときに、であればこそ‥‥目にした事実（疑問）を一般多数の側から拾いあげてゆく場が増えるなら、そのことに「賛成または歓迎」したいと思います。（多面的に難しいにせよ‥‥）

そもそも性は、労働意欲と労働人口の源泉でありながら“真っ先”に規制対象（管理対象）になってきたような気がしないでもないですね。

とくに戦争が始まる前夜には「性文化」は息を潜めるような気がします。

学問においても、生活としての「性」は‥‥それを専門とする場合以外で「性」の要素に触れることは‥‥やはり（緩やかな）タブーなのかも知れません。

それがために、せっかく「顔」について語っても、「性」の話が無いか、有っても話を柔らかくするための枕‥‥そうでなければ抽象的な扱い、あるいは特殊な事例になってしまうのでしょうね。

そうすると「顔」がインターフェイスでありアイデンティティーであるとともに「価値そのもの」である多重性を見落としかねないのです*。

*注釈

おなじことは、コミュニケーションにも言えるでしょう。

「顔」の伝達的側面をより抽象化したコミュニケーションは、「顔」という、いわば“機能の物象化”における価値的側面をも抽象化していると思います。もし、コミュニケーションが目的達成のための手段だと思っている人が多いとすれば、そこで“話”は終わるのではないでしょうか。

その結果として、人との接し方・伝え方の話へとコミュニケーションの世界を限定してしまっているのが、よくある“コミュニケーション術”としてのコミュニケーション論だと思います。

１歩進んで、コミュニケーションを「生産」手段だと思っている人は、コミュニケーションによる生産という発想を「コミュニケーションの生産」というふうに「目的語」化できれば、つぎの“話”ができると思います（コミュニケーションを生産「させる」という観点が徹底している人には、むしろ商才すら感じます）。

さらに、「生産手段」としてのコミュニケーションを語る人は「コミュニケーション自体」が使用価値でも交換価値でもあることに気づいている可能性があるので、コミュニケーションについて語りあう「コミュニケーション価値」がありそうです。そうなってくると「コミュニケーション内容」の非通貨的価値（→簡単に言えば物物交換価値）に‥‥とりわけ「コミュニケーション様式」の価値に‥‥うまくゆくと「コミュニケーション関係」の使用価値（交換価値）にも話を進めてゆくことができるはずです！　〈了〉

２月の予定

●２月８日（土）　午後１時３０分～５時３０分ごろ

「大衆運動と民主主義–主権在民の新しい息吹き」

講師・砂場　徹さん（「阪神間道路問題ネットワーク」代表世話人）

グローバル化の急進展は大衆の生活を破壊し、社会は荒廃しつつある。だが、政府も議会も民衆の味方ではない。政治と民衆の乖離は大きくなるいっぽうだ。

軌を一にするごとく、ふたたび戦争の危機を叫ばねばならなくなってきた。地球環境の破壊は止まっていない。この状況を好機とばかり、戦争熱望者の策動がすすんでいる。政治不信のこのとき、誰が戦争を防ぎ、生活を守るのか。

それは民衆である。民衆の民主主義を要求する闘いである。地域住民の自主的な生活防衛の行動は多様に広がっている。それは主権在民の新しい息吹きである。官製の地方分権ではなく、住民の自立・自律の運動が芽吹いている。これこそ政治と民衆が結合できる力にほかならない。だが、その力をそぐ企みも巧妙になっている。

●２月２２日（土）　午後１時３０分～５時３０分ごろ

「日本経済の混迷を問う

–バブル崩壊後の日本、スウェーデン、ノルウェーの比較」

講師・宇仁　宏幸さん（京都大学経済学部教員）

◆いずれも尼崎労働福祉会館（阪神尼崎下車、駅西の南北道路を道なりに北へ徒歩８分）

◆参加費は一般千円、維持会員五百円（予約不要、入退室自由）